

創設142年鳳祭

10月29日(金)~31日(日) オンラインで開催

「新生——未来へ道を拓く繋ぐ——」をメインテーマに、創立142年専修大学鳳祭が10月29日(金)から31日(日)まで、オンラインで開催される。

新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、初のオンラインでの開催になる。学生参加型の前夜祭、ミス・ミスター専修コンテスト、ゲストによるトークショー、外部バンドを招いての生ライブを配信するほか、各サークル・団体の動画での発表を予定している。

詳細や視聴方法は、鳳祭実行委員会の公式サイトやツイッターでお知らせする。



実行委員力作の立て看板 =7月17日

鳳祭実行委員長 大島 楽(人間科学3)

メインテーマの「新生——未来へ道を拓く繋ぐ——」には、歴史ある鳳祭を未来につなげたい、そして前回の創立140年鳳祭のメインテーマ「始」を受け継ぎ、続く道を切り拓いていきたいとの願いを込めています。

昨年の創立141年鳳祭は新型コロナウイルス感染症拡大のため、開催を断念せざるをえませんでした。今年もどうすべきかギリギリまで悩み、対面での開催を模索しました。しかし参加者や来場者の安全を第一に考え、同時に歴史ある鳳祭を途絶えさせずにはい

い、語れない、活動できないという状況が続いています。しかし苦しい中でも、一人一人ができることを模索してきました。それは今回参加してくる各サークル・団体も同じだと思えます。オンラインで開催できる喜びをかみ締め、そして次こそ対面で開催できることを願いながら、この創立142年鳳祭を一人でも多くの方にご覧いただければ幸いです。

今年度、今年度と、自由に集まれない、語れない、活動できないという状況が続いています。しかし苦しい中でも、一人一人ができることを模索してきました。それは今回参加してくる各サークル・団体も同じだと思えます。オンラインで開催できる喜びをかみ締め、そして次こそ対面で開催できることを願いながら、この創立142年鳳祭を一人でも多くの方にご覧いただければ幸いです。

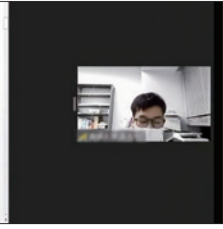
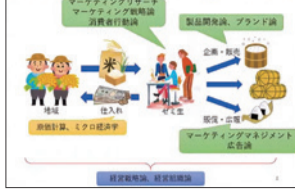


鳳祭実行委員長 大島 楽(人間科学3)

新生——未来へ道を拓く繋ぐ——

オンラインの最終選考会で説明するゼミ生

仕入れから販売まで一貫して学ぶ



経営・森本ゼミ

過疎地域の活性化を提案

新潟県の事業に採択

地域とともに 社会貢献活動

経営学部・森本祥一ゼミのゼミ生が提案した事業が、今年度の新潟県の

「若手人材等による地域課題解決提案事業」に採択された。過疎地域を存続・維持するため、若者が「関係人口」として、地域に関わり続けられるビジネスモデルを提案。今後、実証のための活動を行っていく。

森本ゼミは2014年から、またでの活動をモデルとして、地域課題の解決に真

度から、南魚沼市辻又地区で地域の活性化に協力している。住民と共に作業をしながら辻又産コシヒカリなどを首都圏で販売してきた。

今回の提案は、当該地域の産品や名所といった地域資源を使って、地域と地域外の人材(大学などを想定)、地域と顧客が関わり続けるためのフレームワーク。提案では、実践を通して、明るい地域づくりが可能」と報告した。また、打ち合わせはオン



過疎地域の課題に取り組む森本ゼミ生

ラインで行なっている。今年度は新型コロナウイルス感染症予防の観点から、打ち合わせはオンラインで、地域課題の解決に真

「今年度の採択を受け、ゼミ生は「責任と自覚を持って最後まで事業を遂行し、地域課題の解決に真摯に取り組む」と意気込んでいる。森本教授は「学生の提案が、事業として認められ資金援助を受けられたことは、2019年度に新設されたビジネスデザイン学科、ひいては経営学部の学生の範となると思う。ぜひ事業でも良い結果を出してほしい」と述べている。

半澤さん(平21法)が講演

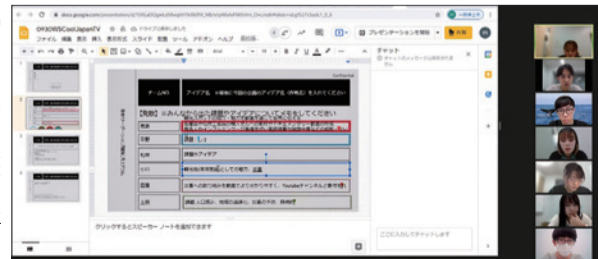
ダイバーシティと協働の意義を学ぶ

リーダーシップ開発プログラム

専修リーダーシップ開発プログラムの後期授業が9月30日に始まった。各回の授業は、リーダーシップを専門とする教員や業界の最前線で活躍す

るビジネスパーソンなどをテーマにしたウェブセミナーが担当。後期初回は、(株)電通のプロデューサーの半澤絵里奈氏(平21法)が講師を務めるなど、ダイバーシティと「ダイバーシティ」と題した講義と演習を行った。講義では、ダイバーシティ&インクルージョンはすべての人に関係することだと説明し、「ダイバーシティ社会を実現するために、前提としてそれを実現しようとする組織の内部の多様性と包摂が不可欠。多様な価値観を有する人たちが、個々の能力を十分に発揮できる場をデザインするリーダーシップが求められている」と語った。

意見を出し合い、グループワークに取り組む受講生



力で盛り上げるアイデア」を求められたチームは、市内の飲食店や施設をバスで巡るスタンラリー企画を提案した。「地域課題をデジタルの力で解決するアイデア」を問われたチームは、地域の魅力や将来像などをYouTubeで配信する地域活性化策を示した。発表終了後には講師と質疑応答が行われ、受講生たちは今後のテーマ活動に生かすために熱心に耳を傾けていた。

◆専修リーダーシップ開発プログラム 経営学部の授業科目(全学公開科目)とキャリアデザインセンターが行っている課外講座のハイブリッドプログラム。受講生は毎週2コマの連続講座と、企業や市民団体と協力した学内外でのテーマ活動に参加。理論と実践の両面からリーダーシップを身につけ、その成果を12月下旬の最終報告会で発表する。

創立142年鳳祭実行委員会公式サイト
ohtori-senshu.com
ライブステージ、サークル・団体の動画視聴、デジタルパンフレット

◆前夜祭
10/29(金)15:30~
ゲスト:東京ホテイソン

◆オンライントークショー
10/30(土)16:30~
ゲスト:磯村勇斗さん(俳優)

◆ミスミスター専修コンテスト
10/31(日)11:00~
ゲスト:さらば青春の光

※いずれも視聴無料、事前登録なし。
録画・録音・画面キャプチャー、無断転載を禁止します。
【問い合わせ】
Mail : ohtori_festival@hotmail.com



— 95 —
八島 純
国際コミュニケーション学部
准教授

機械翻訳で語学不要?

AIのディープラーニング技術により、機械翻訳は昨今目覚ましい進歩を見せている。少し前までの機械翻訳ならば、笑いを誘うほどの不自然でぎこちない訳文ができたものだが、最近では一読するだけでは機械翻訳と気づかないほど精度の高い自然な訳文が得られる。

ここまで実用性が高くなると、「機械翻訳があれば外国語の学習はいらなくなるのでは?」と思う人も出てくるだろう。実際そういう質問をよく受けるが、私の答えは「ノー」である。

例えば、電卓は半世紀以上前に実用化されているが、だからと言って四則演算が学校教育からなくなっていないことから分かるように、「技術で可能」=「学習不要」という等式は必ずしも成立しない。

さらに言えば、機械翻訳の精度が高くなる方が、かえって高度な外国語能力を身につける必要性が出てくるとも考えられる。電卓は入力自体を誤らなければ計算結果を一応鵜呑みにすることができるが、機械翻訳の方は精度が著しく向上したとはいえ限界がある。一番厄介な点は、訳文が完璧に近い自然な文であればあるほど、その中に誤りが含まれていた場合に看過してしまう可能性が高くなってしまいうことだ。

実際、私が先日機械翻訳を使用した時のエピソードだが、「〇〇が3分の1減少した」と訳すべきところが、機械翻訳の結果では「〇〇が3分の1に減少した」となっていた。「3分の1減少する」と「3分の1に減少する」はいずれも日本語としては文法的に適格な文だが、意味するところは大きく異なる。

最後に物を言うのは、やはり己の語学力だ。(言語学<統語論・意味論>)

短縮版。全文はCALL教室ホームページで。